

第 18 回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

1 日時 平成 18 年 1 月 29 日（日）午後 2 時 30 分～午後 5 時 30 分

2 場所 小諸市公民館 2 階 第一研修室

3 出席委員

飯島 俊勝委員長	宮阪 義彦委員
佐藤 元太郎副委員長	滝澤 清登委員
芹澤 勤委員	中沢 裕委員
遠山 順孝委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 碩也委員	原 貞次郎委員
荻原 拓次委員	

4 開会

（植松主任教育支援主事）

本日は、お忙しい中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。それでは、委員長よろしく願いいたします。

（飯島委員長）

ただいまから、第 18 回高等学校改革プラン推進委員会を開催させていただきます。

いよいよ推進委員会も、大詰めであります。本日が最後になるかと思っております。最後までご協力を、よろしくお願いしたいと思います。それでは、お手元の次第にのっとりまして、資料の説明を事務局からお願いします。

5 資料説明

（植松主任教育支援主事）

ちょっと風邪がみでございまして、聞き苦しいところがあるかと思いますが、ご了承ください。それでは、資料の説明の前に、他地区の状況につきまして、簡単にご説明させていただきます。

1 月 18 日の水曜日でございますが、南信地区第三推進委員会で、第 15 回の会議が開催されております。岡谷東高校と岡谷南高校との統合をする、ということが決定をされております。付記を付けることを検討中ということでございます。また報告書に記載する内容について、検討したということでございます。

続きまして、本日 29 日午前中ですが、北信第一推進委員会で、第 18 回の会議を開いております。委員長から、報告書の原案が提出されまして、それについて審議をしたということでございます。確認に残っていた部分につきまして、長野南高校と松代高校との統合という話につきまして、第 1 通学区全体を考えた場合、将来的な生徒数の減少も考慮すると、現時点の生徒数も、生徒の流出入の状況から、この 2 校の統合は、止むを得ないものと考えられるという、こういうことで決まったということでございます。

それから、多部制・単位制高校の設置、配置についてでございますが、第 1 通学区内に

において、できるだけ多くの生徒が通えるところ、および現在定時制や通信制の設置されている、第2通学区の上田市および長野市などの、都市部からの通学の利便性も考慮し、候補案が坂城高校の多部制・単位制高校への転換であることに対して、推進委員会では対案の挙げた屋代南高校を、多部制・単位制に転換をすることが有利であると考えられると、こういう方向でまとまったということでございます。以上、他の推進委員会の状況でございました。

以下高校教育課植松主任教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

6 議事

(飯島委員長)

ありがとうございます。それでは初めに、野沢南高校と望月高校からいただいた、公開質問状について、事務局を通しまして、私のほうにいただきました。委員長であるから私の名前になっておりますが、この委員会にいただいたものと解釈しております。そこで、皆さんにお諮りしまして、この回答をどうするかということですが、委員長と副委員長にこの回答の内容については、お任せいただければありがたいなと思っておりますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

(各委員)

はい。

(飯島委員長)

はい。ありがとうございます。それでは、副委員長と相談の上、真摯(しんし)にその回答をさせていただこうと思います。よろしくお願いします。

それでは、本日、最終報告書の原案を皆さんのお手元にお配りしてございます。前回の委員会のときに、骨子をお示しし、それに対してそれぞれご意見をいただいたわけでありまして。しかも、委員の皆さんには大変お忙しい中、23日に訂正、加筆、削除等のご意見をいただくべく、お願いしたわけでありまして。その最終報告につきましては、後ほどまた、皆さんからご意見いただくとしまして、取りあえずこの第2通学区で、まだ議論が十分でない定時制高校につきまして、皆さんからご意見をいただこうと思っております。

なお、先ほど事務局から報告がありましたように、今日午前中、北信の第一推進委員会では、多部制・単位制高校制の配置について、屋代南ということが報告の中に盛り込まれるということになったということでございます。当然、第2通学区としては、大変影響のある決定であります。その決定を踏まえまして、皆さんからご意見をいただきたいと思います。

お手元の報告書の一番最後のところでしょうか。9ページにあたりますでしょうか。再編についてということで、取りあえず、今の屋代南の決定がある前に、決定でない事項であります。こちらで書かせていただいたことあります。

この内容につきましてもお願いしたいと思います。

なお、この9ページの定時制の再編についての、野沢南高校の定時制、小諸商業高校の定時制につきましては、たたき台におきましても、小諸商業の定時制は残すという形にな

っておりますし、野沢南高等学校の定時制に関しましては、私たちは、多部制・単位制、3部制で残すという形になっておりますから。今日の定時制の議論は、上田千曲高等学校の定時制と上田高等学校の定時制についてご意見をいただきたい。そのようにお願いしたいと思います。

（中沢委員）

ただいま、1 通学区の多部制・単位制が、屋代南と。こういう方向であるという報告を受けましたが。それで、坂城と屋代南との地理的な関係ですね。これが一番引っ掛かるかなあと思います。私もちょっと距離や通学にかかる時間というのも見してみたのですが、上田 - 坂城は 10 キロで、電車で 11 分。上田 - 屋代は 22 分。キロ数で 20 キロ。倍になるのです。それで小諸 - 上田、これがやはり 18 キロで 20 分なのです。

そうなると、地理的なそういうことと、時間的なことを考えたとき、上田にある上田高校の定時制、それから千曲高校の定時制。これを屋代南まで、もっていくということは、小諸と上田の距離と同じになってしまうのです。時間的にほぼ同じなのです。少し遠いくらいです。そういうことから考えると、私は上田には今大勢実際定時制の生徒も、上田高校にいるし、上田千曲には、これは機械科、工業科ですので、これはまた、多部制・単位制の中の普通科と異なるものですから、私は残しておいたほうがいい。こういう考えです。

（飯島委員長）

事務局お願いします。

（植松主任教育支援主事）

ただ今距離の話がでましたので、ちょっと簡単に説明をさせていただきたいと存じます。上田の駅からの、坂城高校、屋代南高校までの所要時間でございますが、坂城高校まではおよそ 26 分。屋代南高校まで 27 分ということで、ほとんど時間的には同じ。

上田から坂城駅まで、先ほどお話のございましたように 11 分でございます。徒歩で 15 分ということでございまして 26 分。それから上田から屋代駅まで、電車で 20 分、それから、屋代駅から屋代南高校まで徒歩で 7 分、合わせて 27 分。ほぼどちらの学校へも、上田の駅から同じような時間で着くという状況でございます。

（飯島委員長）

ありがとうございます。事務局から補足で乗車時間と、駅から徒歩の時間を加味しての、資料をいただきました。それらを含めまして、ご意見をください。

（原 委員）

この問題について前回申し上げたことと、できるだけダブらないようにしたいと思うのですが、9 ページのまとめの案は、定時制について、基本的に多部制・単位制に統合していくことが、適切であると考え。そして、両校がそのように統合するという括弧に入っている意味が、よくわかりませんが、記載されています。

まず、私が第 1 点申し上げたいのは、基本的にこれが適切だと、前回 1 時間弱の議論で

すが、そういうふうになったのかということです。たたき台の際に沿って、いろんな意見が出されているのを、総合的に配慮せずに一方的にまとめられているのがこの文案ではないかと思うのです。このところは、非常に重要なポイントですから、多部制・単位制が定時制に変わる。そういう新しいシステムなのかどうなのか、それについてずっと私は、夏以来議論を申し上げてきたわけですから、その点をもう一度、皆さん思い返していただきたい、というのが1点であります。

それから2つ目は、今事務局から電車の所要時間、徒歩の時間ということが、あげられましたが、これはしなの鉄道の上田駅と坂城駅、あるいは屋代駅という問題であって、この上田両校に通っている生徒の居住地は、上田、小県広範囲に渡っているということも、前回申し上げているわけです。そのことも、十分踏まえる必要がある、ということであります。

そして3点目に、これは、新しく申し上げたいことなのですが、1月10日ごろに新聞で拝見したのですが、教育委員会が県立高校生の授業料減免の問題について発表されて、大きく報道されておりました。今日、家庭の経済的な困難が強まってきています。授業料減免が非常に増えているのです。10年前の、1994年の2.5倍になっている。そして、その減免されている生徒の割合を見ると、全日制は6.7パーセント。定時制はなんと16.9パーセントという数字が、報道されているところであります。

私も実は学校で調べたところ、私の小諸商業定時制では、授業料減免は18パーセントであります。そしてちなみに上田高校にも、ちょっと調べていただいたところ、上田高校は20パーセントという数字でございました。非常に経済的に困難さを抱えながら、それと同時にそのほか、さまざまなハンディキャップを負って、この定時制に來ているという実態が、よりリアルに浮かび上がってきている報道だと思うのです。

それを坂城であるとか、あるいは屋代南とか、そういうところにもっていくというのは、ちょっとむちゃではないでしょうか。あまりにもそれは、今日の困難を抱えている高校生に対して、配慮がないと思うのであります。以上の点を申し上げたいと思います。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。なお定時制の議論が、時間数が少ないということは、やや当てはまらないような気がするのです。といいますのは、多部制・単位制につきまして、当然3部制の議論をしておりましたから、上田高校、上田千曲高校、あるいは野沢南、小諸商業という、個別ではいたしませんでしたが、定時制はどうあるべきかという議論は、ある程度当初から進めてきたと認識しております。そんなことを含めながら、この多部制・単位制へ統合していくことが、ふさわしいという言葉も含めながら、次の中の括弧の中は、点線の四角の中ですか、これは坂城高校、屋代南がまだ決まっておられませんから、非常に不確定な要素なものですから、このような四角の中に入れさせていただいてあるわけであります。ですから、この不確定要素の中と、今の原委員が言いました、適切であるという言葉の、この辺のところのご意見をいただければと思います。

上田高校の、この学校要覧を見ますと、学校要覧をお持ちの方は、15ページだと思えますが、生徒の職業について載っております。1年、2年、3年、4年と。4学年載っております。1学年につきましては、32名の生徒のいる中、無職の方が31名いらっしゃる。そし

て2年になりますと、当初から入学した人数かどうかその辺のところは、要覧からわかりませんが、だんだん学年を踏むごとに、職業を持つ生徒が増えてきて、この辺のところも、見て取れるような気がいたします。

それから、通学をしている範囲というのは、やはり上小が多いように見て取れます。その辺のところを考えながら、いかがでしょうか。

(滝澤委員)

高校生の保護者という立場で私は意見を申し上げます。

私は上田市の外れから来ておりまして、今でも高校生いるのですが、高校へ行くまでに、自転車それから電車を乗り継ぎまして、40分ぐらいかかっていると思います。雨の日や、雪の日は場合によっては誰かが送っていくというようなこともございます。

定時制に関して考えますと、屋代なり小諸なりまで、上田駅から通うということになりますと、多分1時間以上、場合によっては待ち時間等も含めると、1時間半ぐらいかかるのではないかと思います。そうしますと、昼間の多部制の場合には、それなりと、その辺学校まで通っている子どもたちもおりますが、帰りのことを考えますと、多分10時半とか11時にならないと、帰ってこれないというそういう状況に、多分なると思います。そうすると、実質的には通えないというか、通わせられないという状態になると思いますので、夜間定時制に関しては、もう少し柔軟に生徒の動向を見ながら、決めていくという、そんな選択肢もあるのではないかなと思います。以上です。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。生徒の通学の方法も加味しながら、柔軟に考えたらどうかということであります。今の滝澤委員のお話を聞いて、この要覧を見ますと、定時制の徒歩、自転車、バイク、この辺が非常に多いですね。その辺のところを考えると、そんなご意見もでてくるのであらうと思います。ほかの委員さん方はどうでしょうか。

(荻原委員)

私は、やはり前に議論の中で、上田は約20万人と、佐久は10万人という、そういう人口の数字が出てきて、上田が6校、佐久は6校というような格好でやられました。そういうことを考えれば、定時制においては残るのは小諸商業、違う形で野沢南。そうすると上田地区は、どこも残らないということ。それは、屋代にもっていくということは、そういう順行的な面からも、上田に残していいのではないかなというのが1点と。

それと、これは突然意見を出して申し訳ないですが、多部制・単位制の定時制と、現在ある例えば残る小諸商業の定時制というものとは、やはりちょっと性格が違いすぎるのではないか、というような気がしているのです。

本当に、現在の定時制は個に寄り添えるような格好の定時制、居場所としての定時制、というような格好のものが、やはり一番不登校あるいは、進路転換、そういう格好でやっているところの部分が、単位制となるとやはり相当違った格好の、3修だとか、4修等の問題もありますが、そういったことが一番心配な部分なもので、私としては、そういう意味からやはり残してもいいのではないかと、そういう少数意見でございますがよろしくお願

いします。

（飯島委員長）

ありがとうございます。だいが委員の皆さんからは、上田に残したほうがいいという意見が強いようです。ここで2校を残すのかどうか、そんなこともあろうかと思えます。それは片方は職業高校であります。片方は普通科であります。前回事務局から答弁をいただいた中では、長野県の職業高校の定時制は、かなり普通科に移行している。希望も多い、という話も確かあったような気がしております。その辺も含めましてどうでしょうか。別々な問題から2校残すのか、あるいは残すにしても、1校の形で統合して残すのか。その辺のところのご意見はどうでしょうか。

（滝澤委員）

そういう議論になってきますと、小諸商業を残すのかという話が、セットで話としては出てきてしまうのではないかと、思うのです。

私が言いたかったのは、将来的に多部制・単位制に統合されていくかもしれないのですが、今の状況ですと、あまりにも夜間の生徒に対する負担が大きすぎるし、それから屋代南にできた場合には、かなり広域になると思いますので、そういった規模で上田市が、その授業を全部賄いきれるのか、というところがありますので、少しダブった状態でしばらく様子を見たほうがいいのではないかなと思います。そういう意味では工業科というのも、だんだんほかの定時制が募集を停止したのと同じように、需要がなくなれば当然存続できなくなると思いますし、需要があるうちはやはり通える範囲に、それなりの選択肢は残すべきではないかなと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。ほかの委員の皆さんはいかがでしょうか。

（芹澤委員）

現在の定時制の実態がよく分からないのですが、ただ今の段階で、昼間3年間で勉強しなければいけないそういう人たちが、止むを得ず定時制という形で、所属している部分が多いのではないかと思います。無職の人を含めてですね。夜だから、不便だから遠くというより、むしろ多部制になることによって、今いる定時制の人も多部制の中の午前の部や、午後の部とか、こういう形で移行していく可能性の方が強いかなと。そういう面も考慮していく必要がある気がする。そんなふうに思っています。

実態として、長年定時制にかかわっていた原委員さんに、その辺どうなのでしょう。要するに、昼間以外での3年間でやるのに、なじまないとか、無職の人も含めて。昔みたいに経済的に、本当に困って定時制という人という部分と、多部制になることによって、多部制の中でも午前、あるいは多部制の中の昼間、それから多部制の中の夜間というのですか、そういうふうに分かれていくことも考慮して、必ずしも夜遅くなるという定時制という部分はどうかという、その辺の議論をする必要があるのかなと思うのです。

(原 委員)

お尋ねの件に、十分答えられるかどうか自信がないのですが。多部制を設置した場合に、現在の定時制を含めて、一定のニーズがあるということは、私もそう思っているのです。

例えば、生活のリズムからして朝のほうが、あるいは午前のほうがいいのか、あるいは午後がいいとか、あるいは最近、人との接触がどうも苦手だと、できればある面で孤独ですが、勉強だけやって単位を取ってという、そういう考え方を持つ青年たちも結構いると思うのです。そういう点では、一定のニーズはあると思うのです。

ただ先ほど委員長がちょっとふれられていましたが、1 年次にはほとんど仕事に就いていないという実態が、それは5.1 調査ですから、入学した直後の段階ですから、そのあとの就業状態というのを数字の上では表していませんから。私の見るところでいきますと、いろんなハンディを負って定時制に入ってくる、もちろん入学時にはまだ仕事を持てない。それが夏休みごろになると、アルバイトで少しずつ始める、という経過をたどるところが多いです。そして、それも2 年次、3 年次、4 年次となるにしたがって、その就業率は高くなっていく。また就業形態もフルタイムに近いような、そういうことになっていくと、この間の経験では見ているのです。

そして、もうひとつの大きな問題は、一定のニーズはある。しかし、変えうるかという問題になると思うのです。芹澤委員さんのそのご質問は。その部分なのですが、まずは自宅から近いところに通う。あるいはその自宅から近いところに職を持つ。そして学校にも通う。その中で必死になって、その新しい人間関係をつくろうとチャレンジしている。そういうのが、今日の私の高校もそうだし、そのほかの定時制もそうだと思います。

ですから多部制の場合には、もちろん実際に経過していく上で、いろんな工夫がもしできた場合に、さまざまな工夫はしなければいけないし、やっていくでしょうけれども、その場合に、そうしたきめ細かな、しかもそれを制度として、学校のシステムとして、作り出していくことができるかどうか、これはよく様子を見ないと分からない部分があります。そのようにやりましようと言っても。つまり多部制が変わり得るかということは、私は少し不安を持っているのですが、何よりも、事態の推移の中で検証しなければいけない、と考えています。少し時間をおく必要があると思います。

例えば、今日の午前中の結論かもしれませんが、屋代南におかれると。ではそういうところで、どこまで今日の夜間定時制が果たしている機能が、吸収されて、成功的に進められていくか。こういうのを検証しながら長野県の、少なくとも3 番目の土地ですから、そこにある定時制をどうするか。このことをゆっくり考えていくという、そういうことではないでしょうか。というふうに思うのです。

(飯島委員長)

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

(和泉委員)

この定時制の問題は、将来的には、多部制・単位制に習練していったほうがいいのではないかと思います。それは午前、午後、それから夜間ということがあって。それから、この定時制自体は、昔はやはり働くということは、だいたい5 時に終わることがイメージに

あったのですが、今の社会のあり方は、われわれの企業も、夜勤があったり交代制があったりしているので、非常に勤務体制の時間が多様化しているので、そういう意味で、ウィングを広くしておいて、対応していくことが一番いいのではないかと考えています。

ただ、今回の上田千曲と上田高校の定時制については、将来の、これは私の意見なのですが、どこか上田地区にも、将来的に次の改革のときには、ひとつぐらい残ることはあり得るだろうと思っているのです。その中で、この問題は、ひとつはやはり収斂していくほうが、一番いいのではないかなと思っています。

ただ、公立という面では、上田千曲と上田高校の先生たちの効率を上げるためには、その科目や、運用面はひとつの高校のイメージで、効率よくいっていただいて、生徒については従来のシステムで取りあえずはやって、次回の改革あるいは、多部制導入のときの中でやったほうがいいのではないかと、と思っています。

それは、なぜそういうことかという、ひとつは上田地区に多部制がまだ入っていないということがひとつ。それから、この委員会を進めるときには、屋代か坂城かという問題がはっきりしていなかった状態での討議だったので、その辺については、要するに、先ほどの報告で知り得たような状況だったので、その辺は考慮したほうがいいのではないかと、と思っています。

（市川委員）

お願いします。多部制・単位制の本来の意味というのは、多様性、あらゆる制度を受け入れることができるという立場なのです。ですからいろんな講座があることが前提で、それに対して私たちは、中学の指導の立場で非常に期待しているのです。

原委員さんが、前々回おっしゃられたように、学級中心に指導されてきて中学の義務教育の中で、それで人間関係で疲れてしまったと、そういう子を守るものです。不登校の傾向がでてきてしまった、そういう生徒が定時制で受け入れられてきたという、そういうお話が原委員さんからあったと思います。

従って、必ずしも学力が不十分だから定時制にいったというわけではなくて、中には十分に学力がありながら、全日制の中で自分をすべて、全日制の場合は、朝から十分の班活動が全部ささげていくというか、そういうような全部この生活を、一体化していく全日目に合わない子というのは、なかなか今多数でてきているというわけです。それにプラス、高校の中途退学者がまだ出てきている。これが1,000か2,000人ずつ長野県には出てきている。

そういったニーズが高校の卒業資格というのが欲しい。じっくり勉強したいということが、希望の大多数の生徒が、多くがその定時制にいるということですが。これが改めて多部制・単位制で、今までそういった夜中の生活から、昼間の生活に打って出ることができるのは、初めて表に出てきて活躍ができるわけです。必ずしもこの子たちは、働いているということではなく、趣味を生かすことも可能なのです。

ですから他県の例に見ますと、午前中にサッカーを十分にやって午後勉強するとか、日本舞踊をしっかりとやりながら、将来を通学も目指し、時間がかかるかもしれませんが、進みたいので多部制にしたとか。そういったその多様な生き方といいますか、働くだろうし、趣味も生かすだろうし、留学もするだろうということで、大変ほかの面ではニーズが

あうということなのです。そういう点につきまして、これはもう国公立4年制大から、有名私立から、あるいは自分の希望通りの正社員の道とか、そういったキャリア教育も含めて、進学指導を十分に個別になされているわけです。これがひとつの学校として、夜だけではなくて、昼間の朝から、いつも広げて待っていてくれる。こんな素晴らしい学校なのです。

私は、これはやはりできればそれは、どのようになるかは、将来的にはわかりませんが、今ある先生方の人的な配置の問題もあると思うのですが、いかがでしょうか、定時制の先生方が今までもってらっしゃる、そういったノウハウというか、全部結集されて集めて、多部制・単位制のところに集中して、あるいは新たな講師陣に含めて、新しい個をつくるつもりで、多部制・単位制に力を入れていらっしゃるかどうか。

そのためには、ちょっと必ずしも無くなるということではないと思うのです。力を結集して新しいものをつくる、先生方が今まで定時制で少し分散されていた先生方が、1カ所に集中してつくられていることも私は、ひとつまたノウハウも生かせるし、ニーズも生かせる新たな道として、非常にいいと思います。私、期待していいと思います。期待しておりますので、ぜひそのような方向でお願いしたいと思っております。

(西村委員)

先ほど和泉委員がおっしゃったように、働くという概念が、多分変わってきていると思うのです。まさしく今までは、昼間働くというのが通常の働く概念でございましたが、おっしゃったように、24時間テレビもやってますし、いろんなパターンで夜の仕事もある、朝の仕事もある、夕方の仕事もある。そういった意味で、今回われわれ考えている多部制・単位制で、いままでのような定時制はカバーできていると思っています。

ただし、先ほどいろんな方がおっしゃっている中で、今その定時制に行っている子どもたちが、抱えている問題が2つありまして、ひとつは精神的にハンディキャップをもった子が多いということ、もう一つは、金銭的に、ハンディキャップをもっていると子も割合と多いということで、この2点から考えると、あまり遠い通学というのは負担等が、やはりかかってなかなか厳しいのではないかと私は思います。

そういった意味で、基本的には多部制・単位制カバーできていると思うのですが、今回の上田地区からの屋代南については、若干の危機感というものを持っております。そういった意味では、2つある上田高校、上田千曲高校については、やはり少人数といえどもある程度の規模というものも、これから必要だと思っております。私はひとつにして、残した方がいいのではないかなという感じがしています。

(飯島委員長)

ありがとうございます。事務局どうぞ。

(吉江高校教育課長)

すみません。今定時制の関係でいろいろご議論いただいている次第でございますが、2、3点述べさせていただきたいと思います。まず就労の関係でございます。いわゆる就業の関係でございますが、これについては、確かに1年次において極めて少なく、2年次、3

年次は多くなっております。

それは、大きな理由としましては、いわゆる定職についているという位置づけではなく、これはお見えいただいている委員さん方の中にも、十分ご承知の方もいらっしゃると思いますが、夜間定時制の場合には、夜まで時間がどうしても空いてしまう。その空いてしまう中で、ある程度規則正しい生活を送るために、アルバイト等も含めまして、就労することによりまして、当然ながら就職といいますが、職業に対しての意識も持っていたきつつ、またある程度、場合によって生活パターンが崩れるような生徒さんに対しては、しっかりした生活パターンを、維持していただきたいというような趣旨から、就労というような面が、ある程度比率が高くなっていくというのが、現状でございまして、またこのような指導を、定時制におきまして実施しているのは、事実でございます。

ただしかしながら、先ほどからお話にございましたように、あるいは以前も私どもで、お出したデータの中でもご覧いただいておりますように、今現在本当の意味で、生活のために、定時制に通わざるを得ない生徒さんというのは、10パーセントに満たした状況ではございません。

そんなことを考えますと、おそらくは昼間のいわゆる午前部、午後部というようなことで、多部制・単位制という形の学校が立ち上がった場合に、これはもちろん生徒さんの資質の問題に限らず、ひとつの生活パターンの中で、十分そちらのほうに通われる生徒さんというようなものが、増えてこようかと思っています。

それを考えた場合には、ひとつの流れとしますと、1例申し上げまして、松本に松本筑摩高校というところがございしますが、そこには現在、飯田市の隣の喬木村から通っている生徒さんもいらっしゃいます。そういうように、遠くから通われている生徒さんがおりますように、この地域の場合において、程近い学校が多部制・単位制、またさらには、この地域の佐久のほうにも多部制・単位制ができれば、上田地区からも十分お通いが可能な地域であろうかと考えております。

この上田地域であれば、2校という私どもの案について、それが先ほど西村委員さんからもお話ができましたように、場合によって1校でいいのかどうか。1校の案は、2校を直ちにということではなくて、1校でどうかというようなことは、これは議論がとおりになるかと思っています。それが1点と。

それから、先ほど授業料減免のお話ができました。授業料減免につきましては、単に定時制に限らず、全日制も含めてのお話でございしますが、当然ながら今後、統合によりましてできる学校につきましても、そのような必要がある生徒さんが、就労されているとすれば、当然そういうような制度を使って、いろんな形で、私どもとしてもご支援をしまいうるというようなことが、大前提として考えております。

それからもう1点でございしますが、平成15年度からでしたか、中野実業高校が今までは機械科関係の定時制であったものを、普通科関係の定時制に改善してございます。またそれまでの間も、今までいわゆる実業系の学科であったところ、科目であったところを、普通科に転換するというようなことを、私どもはしてまいっております。と申しますのが、ちょっと以前の、いわゆる工場がお近くにあって、その工場に通われている職員の方を、主に対象にした形での定時制という形態は、かなり現在では変わっております。

そんなことから、やはり先ほどもお話にしておりますように、高等学校の資格等を取り

たいというようなお話の場合に、多くは結果として普通科志向が多くでるといようなこともございまして、定時制事態の位置づけも、私ども変えてきているといようなことが現状でございます。

ですから、今後例えば上田地域でいきますと、普通科とそれ以外の科がある学校がそれぞれあるわけですが、方向づけとすれば私ども今後とも、定時制いわゆる夜間定時制でございますが、夜間定時制につきましては、普通科の形に変えていくような方向であろうかと、考えている次第でございます。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

(中沢委員)

多部制・単位制とその定時制、かなり似通った面はあるということは、私も感じていますが、少人数でやっていくというのは、そういう点というのか似通っている気がしますが、多部制・単位制は、基本的には学級といいますか、学年制を組まないです。定時制は学年制なのです。そういう違いがあるのですが、近くに多部制・単位制ができて、昼間からのそういったコースもできれば、現在夜間に来る定時制の生徒も、いくらかは昼間のほうへ行きたいという希望者があったりして、吸収されていくということは、予想は十分できるのです。

しかし、一番は、やはり幾つか意見でいったとおり、距離の問題も大きいわけですね。それは駅から学校までの距離というのが、若干差はあるとしても、例えば上田に定時制が無くなった場合どうなるかという、小諸から屋代まで無いわけです。この距離は鉄道だけで 48 キロです。48 キロ間に無くなってしまいます。それで屋代に多部制・単位制ができて、次は定時制は長野です。長野商業です。これはそんなに無い。それから小諸商業から野沢南の距離、これも 20 キロと無いと思います。そういうバランスを見たときに、もし上田地区に無くなった場合には、ポンとその間が飛んでしまうのです。

そういうことから言っても、通学上非常に厳しい面がでてくるといことだと思ひます。そういうことから、私は上田地区にはやはり定時制が、あっていいだろうと思ひます。

(太田委員)

お聞きしたいのは、千曲高校の機械は、そこへ通われている生徒さんは、どうい意識をもっている人たちなのでしょう。昼間働きながら、夜は実業教育を受けたいと、専門性を高めたいとい人なのか、もともと働きながらどこか夜の学校へ行く。たまたま千曲の機械系のところへ行かれるのか。その辺の実態調査というのが、何かありましたでしょうか。

(飯島委員長)

事務局、すぐわかりますか。今の生徒の実態等について。

(柳澤教育主幹)

中信地区でも議論がございました。松本工業高校がやはり工業科でございますが、松本筑摩の、多部制・単位制に統合していきましょと、こういう合意がされて、そういうまとめで報告をいただきました。その折にも、松本工業に通っている生徒さん方の様子をお聞きしたわけですが、今工業科の定時制に学んでいる生徒さん、必ずしも工業科に学んで、それを生かして、その先へというようなことではなく、やはり、基本的には、高校の卒業資格が欲しいと、こういうような傾向が強いということでございます。

従って、先ほど課長からも報告させていただきましたが、平成 15 年にも中野実業高校の機械科を、普通科に変えているというような傾向で、今後もそういう方向でいきましょというのが、ひとつの流れになっているということでございます。

(太田委員)

ありがとうございます。そうしますと、上田高校へ流れていくのが、自然の流れだと思うのですが。それがなぜ千曲高校の機械で、この 50 人近くの方が、勉強されているのか、そこが私ちょっと理解できないのですが、そこまでわかりませんか。

上田高校へ入るのにそんなに難しいのでしょうか。失礼な言い方なのですが。そういう倍率とか定員の問題もあるのですか。

(飯島委員長)

定員の問題が、多少あるかもしれないですね。

(太田委員)

分かりました。ただそういう生徒さんがいるわけなのですね、機械の実業教育を受けたいという方が。そうしますと今度、屋代南高校には、そういう機能あるのですか。先生もいらっしゃるのか、設備があるのか、どうやってその生徒さんのニーズに、答えていくのか。そういう考え方はございますか。方法論の問題ですが、考え方でよろしいですが、何かありましたら。そういうものがきちっと用意されていて、ではどうかなという論議をしていかないと、ただわれわれ無責任ですね。そちらのほうへ行ってもどうだということは、私は言えない。そう思っています。

(中沢委員)

すみません。

訂正をお願いします。

小諸から屋代まで 48 と言ったかもしれません。38 です。すみません。

(飯島委員長)

はい。太田委員の質問と併せまして、中野実業の定時制が普通科に変わったということですが、それで不便を感じたという生徒の報告はございますか。それだけお願いします。

(吉江高校教育課長)

中野実業の場合、先ほどもお話も申し上げまして、また今も柳澤からもお答えいたしましたように、平成15年に変えまして、それでそのときに変えたことによりまして、その分の、例えば今お話ございましたが、受け皿という言葉がいいのか別としまして、無くなってしまって困ったとそういうようなお話は、私どもには全く入らなかった状況でございます。

その後平成16年からは、今度は須坂高校の定時制の募集停止を行ったのですが、募集停止をするにあたりまして、もちろん議論がありましたが、16年にスタートしてからは、特段これについても、いろいろなご指摘は受けた経過はございませんでした。

なお、今太田委員さんもお話にございましたように、例えば松本筑摩の定時が今現在の科目があるということの中で、そこをいじることによりまして、うんぬんというようなお話があったとしまして、今度予定しております、例えば野沢南とか、あるいは最終的に報告書でどのようになされるかはさておきまして、屋代南とかというようなところに対して、これは単位制でございますので、大掛かりな機械設備を使つての、今現在の実施しているようなものは、仮に無理だとしてある程度、いわゆる工学系のものを、講座として設置するとか、そういうようなことというのは、当然ながらいろいろなご意見等があれば、それをお聞きした上での設置ということは、これはある意味コンピューターの使い方とかも含めまして、考えられることだと考えています。

(太田委員)

ありがとうございます。私どもで論議されてきたのは、多部制・単位制というのは、ひとつの大きな機能としては、セーフティーネットといいますが、悩める若者たちの受け皿にすると、こういう機能。そういうことを含めて、私は賛同したわけです。これもやはり、また元に戻りますが、ひとつその場所的な条件というのが、セーフティーネットを絡めても、どうしても配慮してあげなければいけない条件と思うのです。

いろいろ委員さんから距離的な、補助的な問題も提起されておりますが、それで私は改革の名の下に、弱者が切り捨てられていいのかどうか。特に教育の面でそれを一方的に短期間でこういう処置をして、いいのかどうかというのを、大変疑問を持っています。できれば、和泉委員からもありましたとおり、上田地区にそういう機能の持った多部制・単位制の高校が、次のステップでできないかどうかです。

そういうことも含めて、そういうところで、やはり吸収していくべきではないかということで、今回は私は、多部制・単位制の方向に集約していく方向は、否定しませんけれども、ある一定の時間をもって検討課題としたいと、こういうことで私は考えております。以上です。

(遠山委員)

定時制については、あまり分からないのですが、距離ということを今言われたようですが、屋代へ持っていけば、遠くなると言われたのですが。この場合は佐久地区には多部制を置かないということですか。多部制が佐久地区にひとつあれば、そんなに遠くへ行かなくてもできますからそれを利用すればいいわけですが。私も新設するのをなぜだか分から

なくなつて、ただ4年やるということぐらいしか、それぐらいのことしか分からないから。

佐久地区へ置かないということなら、絶対にそんな遠くへ持っていくことはないと思います。佐久にひとつ置くということになれば、それはそれなりの機能を果たしてもらえないかと考えております。

（飯島委員長）

ありがとうございます。ずっと一通りご意見をいただきましたが、私の委員長意見というよりも、個人としての意見を述べさせていただこうと思います。

坂城高校に多部制・単位制が設置されるとなると、たたき台に準じていろいろ議論を進めていかなければいけないかなと思っています。しかし、少し遠い屋代南に1通の多部制・単位制が移ってしまう。これは私たちの審議とは別で、そうなったわけであります。そうしますと、先ほど事務局から、時間的なことでは、1分の違いかもしれませんがすべてこれ上田高校への通学している生徒さんの状況を見ますと、すべてが公的機関を使って通学している生徒さんばかりではありませんね。当然自転車、バイク、あるいは自分の車を使っております。そうするとこのしなの鉄道の10キロの差というのは、大きいような気がするのです。

そんなことを含めると、私はこの9ページの報告の原案の定時制について、基本的には各通学区に設置する多部制・単位制高校に、統合していくことが適切であると。これは、私はいいと思うのです。しかし、その中の次のところで、上田千曲高校と上田高校の定時制については、この括弧文の中にある、「設置される多部制・単位制に統合していく」という、この文言はちょっといかがかなと思います。

非常に子どもたちといいますが、生徒たちのニーズを私たち測りかねます。ですから、屋代南へ多部制・単位制。私たちの2通では、野沢南に多部制・単位制ができます。それがスタートして、ある程度生徒の動向が、つかめるぐらいまでは、今の上田の中にひとつは、ひとつという形になると、今回の募集でも人数の多かったほうの、上田高校という形になるかと思いますが、そちらへ定時制を残すと。そして状況、いわゆる多部制・単位制がスタートして、ある程度落ち着いて、生徒たちの流れというのが把握できた時点で、人数が今までどおり多ければ残せばいいでしょうし。多部制・単位制に生徒のニーズがあって、移るといような形になれば、必然的にこれは、無くなってくるであろうと思うのです。そんな表現が私、上手に表現できませんが、そういう内容でいかがなものかなと思うのですが、いかがでしょうか。

（滝澤委員）

先ほど、上田高校でなくて、千曲高校の定時制に10数人、50人ぐらいですが。定員の関係があってというお話がありました。本当に、定員の関係になっているかどうか分からないのですが。上田高校の募集が1クラス40くらいにしたときに、37、38名とかというような、時期がありまして。今これで、ひとつにという話になりますと、上田地区の定時制の需要そのものを、満たせない場合がでてくる可能性がありますので。場合によっては屋代南に定時制を成立しなくて、上田高校にしか定時制が成立しませんでしたということも、可能性としてはないわけではないわけですから。そういう意味で、今その上田高校の

定時制を、2 校を 1 校にしてしまっただけという話は少し乱暴かなという。やるのであれば 2 校、ある一定期間様子を見て、需要の関係を見まして、1 校に統合していく必要があるのであれば、統合していくという。そんなことでどうかと思います。以上です。

（原 委員）

前にことによると、話しているかもしれませんが、私 30 年前にこういう経験をしているのです。そのときは須坂高校定時制に勤務しておりまして、しかもその定時制の小布施分校に勤務しておりました。私がその小布施分校に転勤したときは、既に募集停止になっていて、3 年生、4 年生だけだったものです。そして 1 年たって、最終学年 4 年生だけになりました。1976 年のことであります。そのとき、その前年度から最大の問題は、最期のわずか 11 名になった 4 年生を、中心校に須坂高校の本校に、統合すべきかどうかという議論だった。

当時は、私も本当に駆け出し何年目のころですが、学校、須坂高校挙げて、あるいは教育委員会の支えもあって、全生徒の家庭と職場と訪問をして、そのわずか長野電鉄の小布施と須坂、このわずかの距離なのですが、そのことによって職場の環境がどうなのか、通学の状況はどうなのか、非常に丁寧に調査し、そして、同時に生徒たちの意向を聞いて、最終学年は小布施へ残すと。こういう結論を得て教育委員会もそれを了承したということがあるのです。どうなのでしょう。本当に無くす、無くすというのは簡単なのですが、もし本当に無くすとするならば、そのくらいの丁寧さが必要だと思います。

先ほど、私が申し上げたこと。西村委員さんからもありましたが、さまざまなハンディを持っていて、今来ている実態。本当に松本工業とか、中実の話は事務局からありましたが、今議論しているのは、中実や松工ではないのです。上田千曲の定時制の機械科の問題。そしてそこにくる生徒の問題を、議論しようとしているわけですが、私たちは今、この最終段階の委員会になっても、その丁寧なデータを持ち得ていないところで、それを無くすということにはならないと思うのです。私は今、30 年前の経験を思い起こしながら、これについてもっと丁寧な対応が、必要だと思います。

（飯島委員長）

私がある程度提案というような形で、申し上げた部分。それから合わせて、上田地区には千曲高校も合わせて、残したほうがいいのだと。残すというのも、先ほど言いましたように、多部制・単位制に統合していくのが、適切であるということでもありますから、移行期間といたたらいいのでしょうか、子どもたちのニーズを、的確につかむ期間が欲しいということだろうと思います。

その点も含めましてどうでしょうか。人数的なものは、私は今年度の入学志願者の第 2 回のデータしか、持っておりませんが、昨年度どのような形で上田高校に入学志願者があって、実際 32 名しか入学できなかったのか。私は分かりませんが、実際 40 人のところを 32 名しか入っておらなかった。それから千曲高校も、これは学校要覧を見ますと 48 名ですが、これが学年別にどのような分布かちょっと分かりませんが、これから見ると、定員的にはある程度カバーできるような人数ではないかな。そんなことは、私は要覧からしか分かりませんが、理解できるような気がするのです。

(太田委員)

今、原委員からのご発言、最もだと思います。私も意外とドライで、ドライというのは行政の政策というのが、教育の政策も含めて、意外とドライに割り切って考えていらっしゃる部分が多くて、大変私は疑問も持ってきております。

例えば企業の例で、われわれ早期退職優遇制度なるものを、募集するにあたって、応募されてきた人たち、それからそういう方たち。やはり、それぞれの家族調査をして、本当に辞めても生活できるのかどうかも含めて、一人ひとり検証をして、再就職のあっせんをしたり、最大限のことをいわゆるセーフティーネットを働かせながら、ひとつの着地点を見ているわけなのです。

そういう面で、あまり乱暴に、もっともっと大切に扱わない生徒を、乱暴に扱わないで、もう少し時間を掛けて、検証をしながらその時間が必要であると。そういう原委員のご意見ももっともだと思います。ぜひそうしていただきたい。

(荻原委員)

上田千曲の話がでておりますが、学校の取組み方の中を見ると、やはり資格取得希望の始業前講座などをやって、相当本格実績があると書いてございますし、企業、保護者、学校と三者懇談会も、雇用情報対策というような格好でやっていらっしゃるということで、それで普通科へいったら、その辺がどう保障されるのか。その辺はやはり、十分研究するべきだと思います。それと関連しますが、現在松本筑摩は、単位制の定時制に移行したわけですかね。そういう中で昼間の定時制が、中卒の不登校が 60 パーセント、54 人というような格好で。それで、3 年生で卒業したのが 54 人中 22 人。そのような格好でやっている。

それで、その先生の話を書けば、最初から、こういう言い方されたかどうか、ちょっと私の聴き方悪かったかどうか、知りませんが、松本筑摩の単位制定時制に最初から本校目指す生徒はいないのだと、というようなお話も聞いたこともあります。夜間定時制については、60 パーセントが中学校のときに 100 日以上の不登校の経験者だというようなお話を聞くと。やはり生徒に、この話を聞いてくれる先生、あるいは少人数、あるいは個の事情をちゃんとつかんで指導している、指導していかなければならない定時制というのは、現在の多様性ということでは、ニーズではないかというような、私は気がしています。

そういった意味では、特に上田では、3 修制をどんどん推進して、それも始業前の講座とか、特設講座というのをやっていらっしゃるわけですが。それと現在の置かれている上田千曲の、その現状とはちょっと違って、一緒にするのはちょっとどうなのかなというような気もしていますので。それがよく研究していくといえますか、そういうことを現在の定時制の特色。あるいは、単位制に移った定時制の、その地区の部分も、いい部分もあるし、悪い部分もあると思うのです。それをちゃんと検討しながら、やっていかないと、ここである程度結論をでますと、その後多分いくと思うのです。その辺を本当にやはり私は対応して、先ほど委員長がいったように、様子を見てもらったほうがいいのではないかと。というような気がしますので、ぜひその方向でお願いできればと思います。

(佐藤副委員長)

私は本来、多部制・単位制が定時制の受け皿であるという認識がないと思っております。そういう中で、私は以前、上田千曲と上田高校の定時制は、1通にできる多部制・単位制。具体的にはおそらく1通にできるといっても、坂城を想定していたのですが、できればそこへ統合していければ、というような意見を申し上げたと思います。

ひとつ私が、非常に心配であったのは、多部制・単位制の受け皿の準備が、非常に整っていない状況があると思うのです。例えば、普通科であれば、ある程度早急に準備すれば、スムーズに移行できるのかどうかちょっと分かりませんが、まあできるだろう。

ただ、千曲の機械科に関しては、これはやはり、資格取得とかそういうことも兼ねた進学であると思いますので、これが多部制・単位制で、受け皿の準備がきちんとできている状態であれば、私は坂城を想定していたのですが、坂城へいくか、屋代南ですか、そこへと考えているわけですが、受け皿の準備がしっかりできていない。そうすると、実業科の場合はどうするのだろうか、という問題があります。そういう中で、委員の皆さんが今まで発言しておりますような、移行期間といいますか、そういう期間が必要だろうなと思っております。

それで、上田千曲と上田高校ということになりますが、それは、移行期間でありますので、やがて移行は適当ではないのかなと。上田高校はこの間、定時制のOBですか、上田市長と会談した話が新聞にでていましたが、かなり在学しています。そういう中で、移行期間ということで、移行できるのではないかなと思います。ただ、いつまでそれを続けるのかという問題があります。その辺の、あくまでも統合が前提ですという中での移行期間でできれば、それが一番。現在の状態ではベターな選択ではないかなと、このように思っています。

(飯島委員長)

ありがとうございます。時間もどんどん過ぎていきますが、大事なところであります。実際入学した生徒さんたちが、途中せつかく定時制に入っても、途中退学の生徒さんもあるわけです。この学校要覧の数字を見ていきますと、初めから4年生が、その4年前に21名しか入学しなかったかという。私はそのようには思えない気がするのです。そういうことを考えますと、やはり、まだ、今の定時制でも十分でない部分はあるのだろうと思います。

当然十分なことをしていただく努力はしていただいていると思うのです。それでは、まだ足りない部分があるから、退学をして、途中で生徒たちは違う道を選んでしまうということもあります。ですから、今佐藤委員が提案してくれましたように、やや多部制・単位制の動向、設置状況あるいは、実際に上田高校、上田千曲高校へ希望する生徒たちの動向を見ながら、移行期間を設けるという形では、どうでしょうか。

そして多部制・単位制というのは、これはきちり機能すれば、私はいいシステムだろうと思いますし、そして本当にいいシステムならば、和泉委員が言いましたように、ほかにもそういう高校ができてくるという発想もでてくるのだと思います。ですから移行期間を設けるという形で、私は、4、5年の移行期間を設けるべきであろうと、いわゆる定時制が4年ですから。その子どもたちが、生徒たちが、1サイクル回るぐらいのことは

設けておくと、学生の動向がキャッチできるような気がするのです。そのような形でどうでしょうか。

そして、当然、上田高校にそのまま 40 人いてくれば、それは移行するという形の意見は、なかなか出てこないのであろうと思います。当然よければ移っていきますから。

（原 委員）

実質的には、今の意見はそんなに変わっていないと思うのです。まとめにおいてどういう文言になるかということは、ひとまずおくとして、しばらく様子を見ようということで、ほとんどが意見が一致していると思うのです。そしてその中で生徒の動向、あるいは 1 通におかれる、多部制を検証しながら、ということで、そういうことでいいのだろうと思うのです。

ちょっと、1、2 この問題もお話しておきたいと思うのです。実は例えば、上田高校さんが 40 名ではなくて、30 名だとか、卒業のときには 20 名になるとか、いろんな推測でお話があるのは当然なのですが、実は、定時制の関係者は、私を含めてあまりリアルに話ができないのです、このことは。これはある意味で個人情報特定できるのです。例えば私、さっきからハンディキャップを持っているという言い方しましたが、どういうハンディキャップかということは言えないのです。本当にこのことをお話すると、ビックリしてしまうというようなことが、いっぱいあるのです。

これは従って、本来委員会は、そういう定時制高校へ赴いて、どうなのかということを、知っていただきたいと思うのです。上田高校なども、40 人以上の応募があって、実は希望者を切らざるを得ない状況があるという。そういう話も私は聞いたことがあります、これについてもあまり具体的には、今お話できないのです。そういうところを、これぜひ意をくみ取っていただきたいのです。本当にどういう実態であるのかということを、経済的な問題については、ある面ではかなりオープンにできますが、そういう問題を含んでいる。その数字には、その数字以上の実態があるということについて、本当にぜひご配慮をいただきたいと思います。

（飯島委員長）

それでは文言についてはまた、副委員長と相談しながら整理して、皆さんにお示しをしたいと思います。多部制・単位制に統合していくことは適切だが、この上田千曲と上田高校の定時制については、今通学している学生たちの動向も踏まえて、移行期間をもうける、という形で進めたいと思いますが、よろしいでしょうか。

はい、ありがとうございます。それでは報告書の文言については、委員長、副委員長にお任せをいただきたいと思います。それでは、ここで休憩を取りたいと思います。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

それでは休憩前に引き続きまして、委員会を再開させていただきます。お願いいたします。それでは13日に、それぞれの委員の皆さんに最終報告書の原案をお渡ししました。それにつきまして、それぞれご意見、修正意見、加筆部分、削除部分のご回答をいただくようお願いしたわけでありまして、大変短い時間でありながら、ご協力をいただきましてありがとうございます。

なお委員長、副委員長と一緒に、お手元の今日配布した案をまとめ上げたわけですが、なお締め切り後もご意見が一人いまして、その辺のところでは多少、私の意見は入っていない、なんていうところもあるやもしれません。十分に委員の皆さんのご意見を、ある意味で文言の中に入れたつもりではありますが、それぞれの委員さんにおかれましては、委員さん自身がそれぞれご意見、修正箇所、加筆部分、申し出た部分については、すぐお目通しができるかと思います。初めから番号順にこれでいいか、皆さんにお尋ねしながら進めたいと思います。よろしくお願いします。

それでは「はじめに」というところではありますが、これは一任された部分であります。特段句読点ぐらいかなというところで、ご理解をいただいたように思っております。これについてはよろしいでしょうか。1ページ目に入ります。2ページ目はどうでしょうか。多少ここには加筆削除があります。ご提案になった委員の皆さんは、それを確認していただければと思います。

次に(2)の総合学科高校、多部制・単位制高校についてであります。ここにつきましては、3ページ目につきましては、加筆部分がなかったと思います。多部制・単位制高校の可能性のところ、設置にあたってのところへ、1項目ずつ書き加えてございます。セキュリティ対策、これも委員さんからいただいたご意見であります。

(太田委員)

多部制・単位制は新しい試みですので、いろいろなことを研究検討しながらやらなければいけないし、設備投資の費用については、特に確認しなくていいんですね。これは教育委員会さん十分ご配慮いただくということで、前回今までもご回答いただいているので、これはもうよろしいですね。

特に情報システム費用というのは、意外とかかるのです。それから外国の方を入れたりいろいろな方が、本当は自由に出入りするような学校づくりが、成功のポイントだと思うのですが、そうすればそうするほどセキュリティの問題というのが出てくるのです。

このところにかなりお金をかけないといけないのか、塀をつくってしまっているのか、それともオープンにして、ＩＣタグみたいなものを付けさせて、居場所を管理のシステムなんてあります。これもお金かかるのですが、そういうことでやるのか。

それから個人のいろんな情報を蓄積して、それを先生方みんなが共有化しなくてはいけないと思うのです。どの先生も、あの人はどういう人だということの把握ができて接触していただくような、そういうきめ細かな接触のシステム、対人接触システムをつくらなきゃいけないとか。

これも今、学校では先生方でメールのやりとりをやってらっしゃるんです。それは各学校やってらっしゃるんですね。メールで情報を共有化して、自分のものだけに生徒情報を

とって、自分だけで持っているのではなくて、共有化できるわけです。そういうシステムどうするのか。いろいろ考えていただきたいところがありますので、ぜひこの点は、魅力ある高校づくりのいったんでもありますので、ご配慮いただきたい。ひとつ意見でございますので。

（飯島委員長）

ありがとうございます。学校にふさわしいセキュリティを、考えていただくということだろうと思います。次に移りたいと思います。

（3）県立高校の再編整備にあたってというところであります。

（荻原委員）

4 ページの1 番下の、「第2 通学区のすべての学校を対象として、再編の議論をし」という部分がありますが、すべての学校を対象としてやったという、私はそういう意識はございませんが、その辺はいかがなものでしょうか。

（飯島委員長）

これはそういうことだけです。第2 通学区のすべての学校を対象にして、再編の議論をし、パワーアップする学校をつくってほしいと、という意見は出たということであります。すべての学校が対象であるよと、ですからそれぞれパワーアップの方向性を考えてほしいと、という意見が実際に出たものですから、ここへ入れてあるわけです。

（荻原委員）

再編という議論ではなくて、例えば充実という議論という部分なら納得できますが、再編という議論の中では、たたき台を中心としてやったということが、私は再編の議論ではないかと思っておりますが、その辺は、しつこいようですがお願いできるかと思います。

（飯島委員長）

どうでしょうかこの辺のところ。これは確か、佐藤副委員長から何回か出たことだろうと思います。すべてが対象校だよという形で、それぞれがパワーアップしなきゃだめだよと、いう形だったと記憶しておりますが、いかがでしょうか。

（佐藤副委員長）

そうです。これは私が確か何回かのときに発言したことです。それで先ほど委員長がおっしゃられましたように、こういう意見が出たということと、なお今後の再編にあたってそういうことを考慮して、再編の結果を出したということです。例えば学級編成とかそういうことに生かしていただきたいと。こういう意味でございます。

（飯島委員長）

荻原委員ご理解いただけますでしょうか。お願いしたいと思います。これから是非このようにしていったほしいという意味合いも、込めているかと思います。

(原 委員)

経過は今、佐藤委員さんからのお話のとおりで、私も記憶しておりますが、そういう構えでこの第2通学区全体を見ている、あるいは第2通学区の高校がすべて魅力ありそして充実するように、そういう期待をもってお話をされたと思うのです。

そして実態とすれば、再編という問題では論議はしてないことは、また荻原委員さんがおっしゃるとおり事実ですから、あまりこれを大きく出さなくてもいいのではないのでしょうか。むしろ魅力のところで、「そういうことを期待したい」としたほうが、全体の議論の流れからすると、素直なまとめになるんじゃないでしょうか。

(佐藤副委員長)

はい、そうだと思います。ただ私はこの再編にあたってではなくて、今提案ございましたように、後に入れてもらったほうがいいのかなと思います。ただ、具体的に私は今ここで、そこまで県教委はそういう再編にあたっての姿が、もちろん持ってらっしゃると思いますが、私は具体的に申し上げますと、例えば第6通におきましては、再編することによって具体的な名前を申し上げますと、野沢南を例えば再編すると、多部制・単位制にすると、こうなりますと私も前々から言いましたように、ここの生徒を例えば臼田高校の充実とか北農の充実とか、そういう形で合わせて対象校にして考えてもらいたい、こういうことを私は申し上げたと思いますが、そういうことも含めて申し上げているわけでございます。

(飯島委員長)

どうでしょうか、この入れる場所は別として、今のような佐藤委員のお考えですと、どこに残したいという気はするのです。その辺はお任せいただけますでしょうか。やっぱりこのまま、現状のままでいいということではないという意見は、実際出てきたわけでありますから、中に盛り込みたいなという気もしているわけです。

(西村委員)

今、原委員がおっしゃったように、このすべての学校が、やっぱり魅力づくりをしなくてはいけないということになりますので、特に再編というところでなくて、全体にかかわってくるようなところに、これは持っていったほうがいいんじゃないかなと思います。

(飯島委員長)

それでは導入する場所をひとつ考えるということで、ご理解いただけますでしょうか。はい、ありがとうございます。そのほかよろしいでしょうか。

次にそれでは、その3、第5区のところ。

(原 委員)

ちょっと、待ってください。

5ページにいきまして、これは全体の高校の学校数にかかわることなんですが、上から3つ目の上田、小県が20万で県立6校、佐久市は人口10万に対してこれはどうなんでしょ

うか。つまり上田、小県 20 万というのは、上田市さらに郡部も含めて総体として 20 万。そういう書き方をするならば、佐久市及び南北佐久地域が、人口いくらだとしないと、これは説得力がないわけですし、同時に佐久市の場合には、ごく近年市町村合併によって、また 6 校になっているというそういうことです。

ですからこの文面は、佐久は学校数が多いんだということを、印象づけるだけになるわけです。これは何度も特に佐久のお住まい、あるいはそのほかの委員さんから、このことは指摘されていて、佐久の学校数が多いのは、これは歴史的な特色なんだという部分が、そのすぐ下にあります。ですからこの文面については、私は適切でない、そういう意見も申し上げて文書でも挙げたんですけど、いかがでしょうか。

（飯島委員長）

これは遠山委員もおっしゃっていた言葉なので、遠山委員どうぞ。

（遠山委員）

ただ今のお話ですが、確かにそういうことも言われるとおりだと思いますが、上田、小県、丸子から東御市まで含めまして約 20 万ですが、この事はこの前発言させていただきました。

（飯島委員長）

はい。どうでしょうか。だから全部記載しますと、今言ったように 6 校で 12 校ですか、なってしまいますし、遠山委員の説明どおりの形で出たものですから、その辺を考慮していく必要があるということで、盛らせていただいたわけでありまして。ほかの委員さん方どうでしょうか。こんな形で、盛り込むということは。

（西村委員）

今の議論は 6 校というところに、重点をおいた議論にするのか、それとも上田、小県地域、それから佐久、南佐久、北佐久地域に議論するかの違いがありまして、たぶん遠山委員は 6 校のところ、議論をおいてされたものです。原さんはそうではなくて全体でおっしゃったというので。それはどちらで取るかは同じことだと思いますが、ただ議論は遠山さんがおっしゃったので、それはこれで残してもいいんじゃないかと、私は思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。誤解を受けないような形で、もう 1 回文言は、副委員長と相談しながら考えたいと思いますが、残す方向で考えたいと思います。ありがとうございます。そのほかにございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは次の 3、第 5 区についてその（1）であります。丸子実業高等学校を総合学科高校に転換すると、いう項目のところであります。ここは特段なかったような気がいたしますけれども、よろしいでしょうか。

それでは、次の 4、第 6 区。6 ページの（2）再編対象校以外の高校というところでありまして。今日は小林委員が、所用で欠席であります。地元の東部高校についての記述があ

ります。ここではあえて小林委員が欠席ですから申し上げますと、小林委員からの提案で、環境緑化、福祉などのコースを導入という言葉で、ということで入れさせていただいたわけであります。ですから小林委員のご意見が、反映されているということを申し伝えさせていただきます。

それでは次の4、第6区について、望月高等学校と蓼科高等学校の統合についてのところで、どうぞご意見ください。

（原 委員）

今日は発言回数が、いつもより多くなっていることを、御容赦いただきたいと思います。

この統合問題については、冒頭に対案のことが触れられ、対案を重く受け止めうんぬんということで、それはそのとおりなのですが、その対案がこの意味を持ち同時に評価されたというが、委員会の議論の中に要はあったと。対案の内容が評価されたということがあったと思うんです。

そして、そのことにかかわっていけば、近年取り組まれているプラットフォームによる実践や、望月高校の授業改革の取り組み、こうした事柄もご報告があり、注目をしたという事実があったと思います。そのことをぜひ触れていただきたい。

それから今ひとつは、前回私が申し上げたことで、前回のまとめの案にあった校舎・校地の問題です。これはどちらが本当にふさわしいのか、ということをも十分検討する必要があります。

同時に、これは前回出されたまとめ案と違って、盛んに佐藤委員がおっしゃられていた、この配慮事項の筆頭に、両校の対等な統合と位置づけているというのが、削られているわけですね。そういう形でまとめられてきて、ここでまた少し方向転換しておりますが、そのことを含めて、対等の高校という問題と、校舎・校地の利用ということについて、これは議論がまだまだなされていません、ということをご指摘しております。

（飯島委員長）

ありがとうございます。いま出ました、皆さんに当初お配りした中には、両校の対等な統合と位置づけているという項目が、入っております。その点と校地の件であります。校地の件は前回も同じように、原委員から出しましたが、これは皆さんのご意見の中で、蓼科高校の校地を活用していくということで、了解を取れたと認識しておりますが、いかがでしょうか。この件につきましては、それを頭において統合を議論していたと、ということで認識しておりますが、その点でよろしいでしょうか。それではこの件につきましては、新たな学校は蓼科高校の校舎・校地を活用するという、この文言はそのままにさせていただきます。

両校の対等な統合を位置づけている、これを省いたということではありますが、これについても委員さんの中から、すぐその下のところで、新しい校舎のビジョンづくりにあたり地域の意見を聞きつつ、県教育委員会がリーダーシップをとって、統合を進めていく必要があるというところから、ここに統合が出ているから、ダブってということであえて外したわけですね。その辺のところ現況では、いかがでしょうか。

(佐藤副委員長)

実は、この最終案に関しては、私と委員長で目を通しました。そういう中で実は、先ほどの最終案の前の案を各委員にお配りして、意見を求めたわけですが、その中で私は、当初の案の中では、両校の対等な統合と位置づけていると、いう項目が入ってありました。

実は、私は昨日午後から出張しまして夜遅く帰ってきましたら、これがファクスされていました。私はこれを見て、正直言ってびっくりしたというか、どうしてこれが削られたのかなあと、思いました。

両校の対等な統合と位置づけていくというのは、一番基本的な考え方です。私は何回も言ったように、この基本を外して、次のしからば統合をどういう形で進めていくかというのは、次の段階の話です。私はこの一番基本のところを、どうして外したのかと私は思いました。そういう中で、一番基本的なものを落として、次に、じゃ統合はどうやって進めるかということで、すべてができますよって話は非常におかしいなと。一番基本的なところがあれば、後ののは付け足しとは言わないけれども、どういう形で進めるかということではないでしょうか。一番基本になるベースが、最初から崩れるんです。そこを抜くということに関しては、県教委と委員長に私の意見を言わせていただきたい。

(遠山委員)

それは対等ということは当たり前のことで、無理に書かなくたって、できるんじゃないですか。それから話し合ってできるわけだから。そんなことは当たり前のことで、文書に残してやっていくということになれば、蓼科高校から、私も立科のいわば地元の町村長として、また蓼科高校の育成会長でもあるんですが、町村会の代表としてここに出てきているんですが、この統合については、望月高校と蓼科高等学校の統合ということですが、円満にいかなければ、統合なんかすべきでないと思います。

それで蓼科高校の場合には、小海高校や軽井沢高校と同じ立場にあるのです。郡の端のほうに位置しています。ただ望月と蓼科が一緒になれるとされているのに、小海高校だって軽井沢高校だって全く合併の話はないでしょう。けれども県のそういう方針だから私もそれに従って、住民の説得をしながらやってきているわけです。それを何かここで校名を変えろとか何とか言われても、実際にはだめです。例えば小諸高校とほかの高校で合併して、例えば「佐久東」と言われても、心が通じますか。だから私は学校名ということをお初めから言っているんです。野沢の高校と望月高校が合併して、「佐久南」と言っただって、誰が心がそこに通じるでしょうか。こういう難しい問題を残して統合した場合、住民も言うことは聞かないし、卒業生も言うことを聞かない。大きなただ理想だけ考えたって具体的にすれば、そんなわけにいかない。私はそう思います。

(佐藤副委員長)

遠山さん、もう少し冷静にものを考えないと、これは統合というのは当然の話でしょう。当然の話を、一番基本的なことをそこで入れましょうと言っているわけです。そこからどうして、その校名だのなんだのって出てくるのか、その辺の話は飛躍的です。ですからこれから出発してやりましょうと言っているわけです。対等の立場で。だってこれが一番基本の話でしょう。それをきちっと書きましょうというので、何を最初から先走って想像し

て、そういうお話をするのかよくわからない。

それからもうひとつ、吉江さんと東京学芸大の先生の新聞対談ですが、一番最後のところに私が考えているとおりのことが書いてあるので、私がちょっとご紹介しますと、「再編を進める上での最大のポイントは地域住民を含めたビジョンづくり、これが1番大切。これができれば再編はほぼ成功するでしょう」とこう言っているんです。

今、遠山さんは蓼科の話だけして、何も文句言わないと言っているわけでしょう。そうじゃない、望月と蓼科、周りの地域全員でいい学校をつくりましょうと、こう言っているんであって、蓼科の話うんぬん、そんなこと私1個も言ってない。ですから、私は望月を、蓼科を中心にして、周りの地域全体でいい学校とつくりましょうということを言っているわけで、何も最初から蓼科高校の名前を外すとか、それはこれからの話で結果でしょう。そういうことをもっと冷静に判断してください。そういうことで私は申し上げます。

（飯島委員長）

ありがとうございます。これ以上行ったり来たりすると大変ですから、お二人のご意見はよくよくわかりましたし、それからこれは議事録にもきっちり残りますし、最終的にはホームページでも紹介されます。遠山町長は対等は当たり前でしょうということを言ってくれましたし、ですからこの字句を残すとすれば、これは両方のお気持ちを受けて、両校ここに統合ということをきっちり初めに言うということではどうでしょうか。両校を統合と位置付けていく、それでその後に2番目の「・」から始まっていると。そして今議事録の中で両方の委員さんがおっしゃったことは、きっちりこれは議事録に載りますし、今後統合にあたって、それを生かして行ってほしいと、思うわけであります。

当初皆さんに原案としてお配りした中の、両校を統合と位置づけていくという形で、生かすという形でどうでしょうか。対等は外すと、対等は当然のことだとおっしゃっていただきましたから。どうでしょうか。折衷案みたいでいけないですが。

（中沢委員）

これは統合という立場に立ったときに、前々から事務局案でも、全くこれは対等の立場だということはずっと言っていました。だから当然と言えば当然なんです、やっぱりこれは大事なポイントかなあとは思っているので、当然のことでも、やはりこれは一文きちんと位置づけておいたほうがいいと、私は思います。

それともうひとつ大事なことは、新しい学校のビジョンづくりにあたって、地域の意見をやっぱり聞いていくという、お互いに意見を寄せ合って、そして県がリーダーシップを持っていくと、その辺が大事ななということを思います。

（飯島委員長）

その地域に意見を聞くということは、2句目に入っておりますから、1句目がどうだということでもあります。どうでしょうか。

(荻原委員)

議論を元に戻すようで申し訳ないのですが、ここでは対等でない合併というのは、吸収合併ということだと思いますが、やはりそれぞれのみんな学校の思いはありますので、それで佐藤さんも、前もそれをちゃんと委員会、統合実行委員会なりをつくっておくべきだという部分もあったわけですが、それは入っておりませんので、その辺も含めると、やっぱり対等という部分は当然入れておくべきではないかと思います。

普通例えば、市町村合併というのは聞いてみれば、対等というのは役職をそれぞれ振り分ける、課長クラスに振り分けると、そんな学校とは違うんですけれども、そんなようなこともありますので。それは遠山委員さんは大変ご努力いただいて、それこそ役場の職員からみんな、夢科高校に行くというような格好でやってらっしゃるというようなことを、本当に聞いておりますので、少し佐藤さんの議論と遠山さんの議論は、根っこが違っていいんじゃないかということで、私は対等を入れておいたほうがいいんじゃないかと思いますが、よろしくお願いします。

(遠山委員)

周りから見ると、対等と入れて当たり前だと言いますが、大半は対等を否定するものではなかったはずで。まとめるには、第三者的なことを言っていたらまとまりません。それは本当に両方に言い分があって、これからまとめていくということになれば、遠山はやらなくてもいいと言うけど、遠山だってこれは小さいところの町長だ。だけどもまとめ役で、みなさん本当にまとめてくれますか。まとめてくれるのならばいいですが、ただ言いっ放しで、あと対等だから好きなことを言って騒がせてやればいいと、そんなことじゃないです。言われた方はまとめてもらいたい。実際理想ではなくて現実だから。だからお互いに言い分を言い合ってまとめてもらいたいです。

(佐藤副委員長)

先ほどの反論のような話で、申し訳ないですが、遠山さんにまとめてくれと、言っているわけではない。両方の学校の関係者にまとめてくれと。ここで私もある意味では遠山さんも、この委員で出てくるのはある意味では、ミスキャストだったと私は思っています。遠山さんは自分の立場でものを言っちゃいけない。私は少なくとも、ミスキャストだと思っていたが、私はつとめて地域委員として、あるべき姿で意見を言ってきたと自負している。遠山さんはいつも、私は非難されるとそういうようなニュアンスで、答えているからおかしな話になっちゃうんです。

(遠山委員)

それならやってください。

(佐藤副委員長)

やります。それはやりますから。だから出てこないでください。

(遠山委員)

文句を出さないでほしい。出て来るなどと言われても私はかかわる事になる。それで円満にいくと思いますか？

(佐藤副委員長)

そのために、私は県教委がリーダーシップをとってやってくださいと、いう一文を入れたんです。両方の関係者だけで話しをしましょうと、言っているんじゃないくて。

県教委がリーダーシップをとって、県教委が最後にいろいろ聞いて判断したら、決めたら、もうそれで決まりということで、やってくださいとこういう意味です。ですから、遠山さんが対等という意味にこだわるというのは、逆に対等じゃないことに、こだわっているんじゃないですか。

(遠山委員)

そうじゃないです。まとめが先だと思いますよ。理想を言っているだけでは事はまとまりません。

(飯島委員長)

どうも、この意見は平行線になりそうであります。委員長の意見に賛同していただければありがたいなと思います。それは今遠山委員がこれだけ対等だということを言っておりますから、その対等の言葉を除いて、両校を統合と位置づけていく。これはその中にそれが含まれているんだと、いうことで十分理解していただいて、そしてその二つ目の「・」新しい学校のビジョンづくりにあたり、地域の意見を聞きつつ県教育委員会が、リーダーシップをとって統合を進めていくと、この二つでいかがでしょうか。ご了解いただきたいと思いますが、お願いいたします。

(原 委員)

ちょっと待ってください。

議論を蒸し返すつもりは、毛頭ありませんが、7 ページの統合後のイメージというところに、ここに地域教育プラットフォームからの、支援という文言が入っているわけです。参考意見だからという気もしますが、これは実は今の本質的な議論とうんとかかわってくるのです。地域の学校を地域が、さまざまな方法で支えるということは、とても大事なことで、これはほとんど合意に近いくらいな意見が交わされたと思います。しかし、これは旧望月町域にある、ひとつの教育の取り組みです。

ですからこれをむしろ、入れるとするならば、上の統合にあたっての配慮事項のところに持って行って、こういったことの活用をはかると。あるいは、私は今文言を整理していないのですが、そういう格好でいくべきですし、もっと考えればそういう地域の教育支援体制というのは、今現に動いているわけですし、その元に望高の内部改革も進んでいるわけですから、そうしたところが対等ではないですけれども、対等問題に戻るわけでもないですが、ジョイント的にするとか、こういうことを生かす方法を考えたいと、地域プラットフォームをここに生かすということです。活用する、生かすと、こういうことについて、

私は意見を申し上げておきたいと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。統合後のイメージ、それは確かに地域プラットフォームは望月の町が、立ち上げたものですが、こういういいものは、新しい高校になっても生かしてほしい、その望月でやっていることそのままという意味ではなく、いい意味で生かして、新しい学校の中に生かしてほしいという意味で書いているわけですから、その点はいわゆる前向きに、考えていってほしいなとこんなふうに思います。そういうことで、その辺のところも十分理解しながら、統合の学校をつくって行ってほしい、こんなことを思います。

それでは、次の（２）野沢南高等学校多部制・単位制に転換のところに、入りたいと思います。ご意見をいただきたいと思います。

（太田委員）

第５区の、丸子実業高等学校総合学科高校に転換のところで、ここでは状況の推移をみながら佐久地域でも必要性が高まった場合は、総合学科としての可能性を考えると一文を載せていただいています。ですから多部制のところにもこういった論点で、上田、上小地区にもこの単位制の検討というものの、一文を入れていただけないかなと思います。

というのは全般の論議の中にも、いろいろなそういったニーズは、かなり委員さん持っていっていらっしゃるし私も持っていますので、それは入れていただきたい。

それから、私はこの学校の形態に魅力を感じるといいますか、賛同しましたのは、やはり外国人の方の受け入れということに、ひとつこだわっているわけなのですが、これは教育などの、法律的なサイドでただ簡単に外国人を受け入れて、教育を施すというような、こういうことは法的にはできるのでしょうか。われわれは簡単に言っているのですが、どの程度の可能性があるのか、その点だけ確認しておきたいのですが。

（飯島委員長）

ではこの件について事務局お願いします。

（篠原教育幹）

現在でもそのようなことも行われておりますし、法律的に問題があるというものではございません。

（太田委員）

例えば、今企業では、派遣業者が外国人をプールして、企業に派遣させているわけです。われわれはそれを、福利厚生費をかけないで、本当にその賃金だけで、実は安い安価な労働力として、中国等との競争力をつけるというような理由づけで、たくさんの方を受け入れているのですが、それは派遣の方に委託している部分がほとんどなのです。朝８時から５時までが、その会社の範疇（はんちゅう）の中で、あとは皆さん第三者に委託したりして、福利厚生だとか社員教育などそういうところには、なんら費用をかけていない。それは、われわれは本当は忸怩たる思いで、そういうことをやむなくやっている。

そういう代わりの機能、支援機能を、どこかで受け入れていただくということは、大事なことなので、ぜひこの学校づくりのところでは、何と言いますか外国からきて働いている方、一生懸命世のためにやっていただいている方の気持ちの場というか、居場所というか、そういうものもつくれるようなという意味で、これを何か確認をこの中で結構ですが、していただきたいと思っているのですが、限界があるのかどうか、これはどうなのでしょう。法的にはないということでしたら、学校経営の考え方の中でこういうこともできるということで、私は受け止めてよろしいですね。そういった確認だけですから。

（飯島委員長）

ありがとうございます。確認だけということで、ご理解をいただいております。

（中沢委員）

7ページの(2)の囲いがしてある最後の部分に、括弧がついている委員の多数意見となったと、いうのがあるのですが、このところの意味合いはどういうところでしょうか。

（飯島委員長）

これは私の方から、提案しなければいけなかったことであります。皆さんのところへ当初お配りしたのは、「適切であると判断した」という文面をお送りしたと思います。ところが、委員の皆さんから「委員の多数意見となった」という形にしたらどうかと、いうご意見があったわけでありまして。意味合いは同じであります、やはりニュアンスが違うものですから、ちょっと私たちだけで判断するよりも、委員会のご意見をいただいて、どちらかに決める方がいいだろうと思ひまして、ここに両方載せたわけですね。私から申し上げず、申し訳なかったですが、ご意見をいただきたいと思ひます。

（原 委員）

今、中沢委員さんの方から質問していただいて、そういうのが出たということでもあります。前回、私はこのことについて最後の場面で発言をしました。つまり最終的に多数決で決めたということについて、そのみにとらわれて発言するのは、本当はどうかと私自身も思うのですが、やはりそういう形で意思表示がされた、その数字が含んでいる内容、これをもう少し丁寧にみる必要があると思うのです。8対5だか7対5だかそういう数字になりますが、これはなるほど書き方によれば多数の意見があったと。しかし前回、私がこのことを申し上げたときに、委員長は、なるほど拮抗（きっこう）していますねと、拮抗（きっこう）という表現を使われているのです。

私は、野沢南の転換に賛成する方と、それに対して本当にいろいろな点で考えると、リスクが大きいとする意見が、やはり拮抗（きっこう）して相半ばしている、とみるのが正しいのではないのでしょうかと思うのです。ですから適切であると判断したわけでもないし、委員の多数意見になったというよりも、そういうまとめ方が、本当にひとつの学校が大きく転換をしていくときに、できるだけ丁寧に、丁寧に議論をくみ上げていくためには、それが必要であろうと思うというのが私の意見であります。

（飯島委員長）

ありがとうございます。どうでしょうか。「適切であると判断した」、「委員の多数意見となった」。私自身はどちらかにしたいとは思っております。実際のところ、先ほど言いましたように議事録、その他ではこう書いてあります。すべてその時の票数が出てまいります。それからその前の多数決を採ろうとしようとした、委員間のやりとりも議事録に出てまいります。皆様のご意見をいただきながら、当日は採決という形をとらせていただいたわけですから、その結果委員の多数意見となるということで、私は構わないと思っております。詳細は議事録をみることで十分理解できるわけですから、そのようにしたいと思っておりますが、「適切であると判断した」と言うと、全員がというニュアンスになってしまいますから、その辺のところを確かにそうかなと思ひまして、ここに括弧書きをして、委員の皆様のご意見を聞くに至ったわけでありまして。

（荻原委員）

私はその大事な会議に欠席したわけですが、私の意見では、多数決にいったんだということを明記していただきたいと、私はご意見を申し上げました。そういった意味では、ここでの議論の中では、最終的にはそういう委員長の選択によったのだと、私はいきさつはわかりませんが、例えば3分の2以上が賛成が必要であったと、あとで考えればそういうことも欠席者の意見として、そのように思うこともございますが、やはり多数決でこれを決めたというのは、初めてなのです。ほかの所は、おおむねそれぞれの議論、主張は入れられなかったにしても、委員長の意見、リードによって統合についても、方法についても皆さん、一応単位制ではよかったと。この議論だけが多数決になったという意義が、どこかにあるのではということで、私はこういう格好で、入れていただければなと思っておりますので、よろしくお願いします。

（飯島委員長）

これはあえてその時の多数決を採ったときの意見のやりとりを、ここでもう一度言うつもりはございませんが、後で議事録をお読みいただくと、私がリードしたわけでもなく、最終的には委員の皆さんから、野沢南校の多部制・単位制の是非をまずとってから先へ進めと、いう大きなご意見が出まして、それに皆さんが賛同していただいて、そちらの方向にいったわけでありまして。ですから私がリードしたわけでもなく、その辺のところはまた私があえてここで、反論を言う必要もございませんが、あえて申し上げておきます。

（西村委員）

議事録を見ると、まさしく委員長がおっしゃったように一瞬的にわかりませんが、この委員会では、非公開というものもございます。それから記名式の投票で決めた案件もありました。それはやはり委員が苦しい中での議論をしたということ、どこかへ載せてもらう、謳う必要があると私は思います。それがここに出てくるのか、それとも一番最後のところで、苦しい議論もありましたという中に入れていくのか、それはぜひ入れてほしいと思います。

ただ、今回の文章を考えますと、「適切である」というところはとりまして、例えば、「転

換していくことと判断した」くらいにしておいて、後はぜひここに入れるのか、それとも最後のページに入れるのか、ぜひその非公開の場合とか、記名式で投票したとか、そういう苦しいわれわれの議論を、どこかに盛ってほしいと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。この点は非常に大事ななと思います。確かに議事録を見れば、非公開にしたその前後の苦しみも、わかっていただけたと思いますが、報告書の中にもその点は、入れたほうがいいのかということを感じます。その点につきましては、また副委員長と相談しながら終わりのところに、考えていくほうがいいのかと、西村委員のご指摘で考えます。その辺そのような形でいかがでしょうか。終わりのところに、今言った多数決という選択や。

（原 委員）

その前に、ここの文章はどうなりますか。

（飯島委員長）

はい。ちょっとお待ちください。今の形で多数決うんぬんという形は、入れていきたいなと思います。それでは今の前の文章はどうするのか。今、西村委員の提案によりますと、3つになりましたがどうでしょうか。西村委員、もう一度言っていただけますか。

（西村委員）

最後のところを、「野沢南高校を多部制・単位制に転換していくことと判断した」と、これは「適切」等の文章をとりまして「と判断した」とする。それでその多数決うんぬんをここに盛めるのか、それとも一番最後に全体のところへ、苦しいわれわれの議論があったというふうに盛めるのか、私自身はちょっと迷っているところなのですが。

（飯島委員長）

ということであります。適切であるという文字を省いて、いくことと判断したと、後のほうに括弧になるかわからないけれども、多数決でやったことを入れた。私自身は先ほど言いましたように、望月高校の件に関しまして、非公開にやった部分も記述するとなると、後ろと一緒に非常に委員会は苦しい中で、こういう選択しながらやってきたということを入れたらどうかと思いますが、どうでしょうか。

（芹澤委員）

多数決で決めたのはこれだけだから、はっきり多数意見だったということは、記載したほうがいいのかと思います。後でまとめて入れると、ほかのこともみんな多数決だったかという考えになるから、実際多数決で決めたのはこの部分で、だからこれはこの部分にちゃんと載せたほうが、議論の中身としては正しいのかなと私は思います。

(佐藤副委員長)

私も、もう一回言う必要はないと思いますが、判断したというその説明が、この多数意見で、それを元に判断したということですから、なにを元に判断したというのを取ってしまおうと、ぼけてしまおうと思います。ということで、私は転換していくことが多数意見を元に判断したと、というような形のものにしたほうがいい。ですから私も芹澤委員と同じです。それで、正式には理由を書かないと、何で判断したかわからなくなります。

(太田委員)

ちょっといいですか。

多数意見という受け止め方ですが、私はこれを見ていくときに、圧倒的にその多数が多かったという評決で、判断がされたというふうに受け止められやすいのではないかなと思うのです。ですからこの表現というのは、もっと違った表現はないのかなというふうに思います。

例えば、これは本当は荻原委員は欠席だったのですけれども、荻原委員の従来のお考えからいくと、委員長を除くと7対6です。僅差(きんさ)です。最後、委員長がという、そういう形は。

(飯島委員長)

ちょっとお待ちください。私はどこに入れたのですか。

(太田委員)

いやいや。委員長を除いた場合です。

(飯島委員長)

そこは間違わないでください。

(太田委員)

委員長を除いた場合、7対6という数字が、私は従来の中で感じると、そういう数字かなと思っているのです。多数というのは、どうもひっかかっていると思います。多数なのでしょう。新聞記事にもそれはされていきましたので、皆さんそれはいろいろな人を見ていて、判断されて、どう受け止めているか知りませんが、実態はそういう数字の中にあるということだけは、やっぱりどこかでふれていかなければいけないのかなということで、西村委員の最後のところということでも結構ですので、そういうニュアンスについては、どこかでふれていただきたいと思っています。

(飯島委員長)

はい。ほかにご意見ございますか。はい。それではここの記述についてはどのようにしましょうか。ここで決定の方がよろしいですか、それとも今の皆さんのご意見をいただきながら、ここへ記述を入れるということで、委員長・副委員におまかせいただいて、ここに入れるということはお決めいただきましたから、皆さんのご意見を十分反映するよう

な形で、報告書に記載するということではいかがでしょうか。はい。ありがとうございます。それでは、そのようにさせていただきます。そのほかの部分のところで、よろしいでしょうか。

（原 委員）

8ページの(3)の再編対象校以外の高校というところですが、1点目の次のような意見が出されたということで、臼田高校のことが書かれています。私もなるほど、こういう意見が出されたことは、十分承知しているのですが、かといって、では臼田高校の事について議論したかというところでもないです。先ほどからひとつだけ気になっているのですが、例えば例の東部高校については小林委員が発言したとか、これについては遠山委員が発言したとか、ちょっと失礼かもしれませんが、お一人の意見が出されたのを載っけてというのは、いかがなものかと思うのです。議論をされたことをやはり載せるべきだと思うのです。そうしないと発言にひとつ同じ重さをもって、受け止められていないという感じがするものです。このまとめ方についてはそういう感想を持ちます。

（飯島委員長）

それでは、この臼田高校の第3の再編対象校以外の高校についてのところの記述の件であります。いかがいたしましょうか。その後には北佐久農業高校のこと、軽井沢高校のことも書かれております。

（太田委員）

この北佐久農業高校の農業科について、これは論議がありましたでしょうか。私は、盛んにこれからの農業教育を、やはりきちんと政策を打ち出して、農業教育を見直さねばいかんということは申し上げたのですが、北佐久農業高校としてさらに充実していく必要があるというのは、大変具体的ではなくて、どういう論議どういう趣旨で、ここで載せていったらいいか、ちょっと迷うところなのですが、この中身はどういう論議でしたか。

（飯島委員長）

再編対象校以外の高校のところの、意見に出たものを挙げただけなのです。ですから、議事録の中からこういう意見が出たと、これから再編については全学校が対象だということとありますから、その中の学校名が出たところをここへ挙げたわけです。

（太田委員）

それは、わかりました。

ぜひ私はこのところ賛成していますので、ぜひこの農業高校、農業教育、実業教育、このところをもう少し表現が何か前向きに、表現ができないかなと思うのですが、結構です。わかりました。

(佐藤副委員長)

私もまとめた一人でございますので、発言させていただきますが、意見が出た、議論したとは言っていないのです。そういう意見が出ましたよ、ですからこれから大いに参考にしていってくださいよという意味で、「意見が出た」とここをしっかりと読んでください。意見が出された、この中で意見が出された、これを誰が言ったということをいちいち列記したら、先ほどの原委員に対するお答えですが、これは限りなく出てきてしまって、やはり主にこのところの、集中的にはないですが、こういう意見がある。ですから個人の名前を挙げるというのも、私も反対。意見が出たというこういう事です。

(飯島委員長)

すみません。私の司会の仕方に対して、異議を出されたということでご理解ください。いいですね、それで。はい。ほかによろしいでしょうか。

(荻原委員)

参考意見ということですか。そういうことでよろしいのですか。少数意見という言い方もあるし、参考意見という言い方もありますが、私もいろいろな発言をしてきましたが、いろいろな方がいろいろな発言をしたわけですが、そういう中で、議事録を見てとったとおっしゃいますが、そういった意味ではその過程においていろいろな、まさに参考意見がいろいろ出たわけです。

それをただ臼田高校、その他という格好では出ていることは確かだと思うのですが、委員長、それをどうやって取り上げたのかなという、ある程度その雰囲気を見て、皆さんの賛成が得たところを参考意見として取り上げたのか、そういった意味で議論という部分では、不足している部分がいっぱいあると思うのですが、意見としてこういうふうに入れたという部分では、まだいろいろな意見があったのではないかと、そういう気がします。別に元に戻すつもりはありませんが、考慮をしていただければと思います。

(和泉委員)

私もこの再編対象以外の高校という項目を見て、返事を書いたのですが、今回の出発点は、魅力ある学校づくり、高校改革と全校が、対象だという認識できているのです。

要するに、それぞれの結論が出たところ以外の学校だけが、特筆されたという認識でこの文面を受け取ったので、基本的にはこれからの改革も、それから魅力づくりについても、要するに今回の対象以外のところも常に、学校経営というか努力を行なわないと再編の対象なのですよ、というこの危機感だけはちゃんと残してもらいたいという、文面をお返ししました。

このところが再編対象以外の高校と書いてあり、数校だけが意見併記されていると、ほかの学校の皆さんがどう考えているか、あるいは当事者がどうお考えになっているかについては、ちょっとわかりにくいと思うので、もともとこの対象は全校ですと。その中で意見が収斂されてきたという認識がありますので、もれがあったりとかそういう意見があるので、これをやはり基本的には頭のところに、基本的には全校が対象であったという、この事実は明記しておいて、各学校に改革を促したいという思いはあります。

(飯島委員長)

ありがとうございます。その辺のところを、それでは十分考えながら、もう一度副委員長と考えていきたいと思います。そういうことでよろしいでしょうか。

それでは最後の定時制の再編については、冒頭皆さんにお話、討論していただいたとおりで、副委員長と一緒にこの文面を完成し、委員の皆さんに検討していただくようにお配りいたしますから、それを受けて最終報告を、この中に入れさせていただくということではよろしいでしょうか。

先ほど、学校が再編うんぬんという言葉に関しましては、その他の記述のところの最後のところに、入れさせていただいておりますが、そこへ入れるのではなく、その辺のところも考えながら、お願いしたいと思います。こちらで考えさせていただきます。よろしくお願いします。

(中沢委員)

前回でしたか、実施時期についてうんぬんということで、私は申し上げてここでは討論は、そういうことは方向付ける必要はないという、そういう方向が出されたのですが、その他のところに、これは実施時期については、やはり慎重に検討してほしいということは挙げていただきたいです。具体的に言いますと、現在の中学３年生、これは再編整備が決定する前に、もう高校に受験していくのです。

(遠山委員)

これはいつでも、同じことになりますよ。

(中沢委員)

しかし、いつからあるということについて、ある程度、わかっていて受験するのと、わかっていなくて受験するのはすごくそこは違うのです。ですからそういうことについては、学校現場でよくよく説明してもらおうとか、学校のイメージというものを具体的にしてもらって、そしてやはり慎重に実施時期については、検討していただきたいということは、私はこのその他に入れてほしいと思っています。

(飯島委員長)

この件につきましては、前回、中沢委員が出したときに、これはここでは議論する必要はないだろうという形で、話がついております。

(原 委員)

今、委員長さんをご発言にされたことの原因は私なのですが、私は、例えば統合とか転換とかいう問題の中で、実施時期のものは当然言及されるだろうという、そういうことを申し上げたのです。私も今日の議論の最後でそのことを触れたいと思いましたが、また、私の意見書は挙げてあるわけですが、今、中沢委員さんがおっしゃるように、この問題なのです。

例えば、今の中学３年生は、今希望調査の数字など出たりしていますが、最終的にこれ

から決めるわけですね。最終的に決めて、2月の前期試験、3月の後期試験を受けたりするわけです。ところが県の策定計画はその後に出るわけです。ですから、自分が入った学校がどうなるかというのは、受験段階ではわからないわけです。そういう問題なのです。一番今、私のところにもずいぶんいろいろな意見がきているのは。

従ってその実施時期については、自分の学校はこれからどうなるのか、わかった段階でというふうにするべきであると思うのです。ですから、ここの議論の中で結論が出たことについて、蒸し返しはしませんが、その統合であるとか、転換であるとか、そういうことを抱えているわけですから、今中沢委員が言われたことについてやはり明記するべきだと。前回の議論の方で、私は転換させた責任を持っていますので、そういう意味で具体的なところから、このことについて申し上げたいと思っていたものですから、発言をさせていただきました。

（和泉委員）

私も途中で意見として言っていますが、この改革ということは、どこかで書き直すことを、定期的に入れるということを、責任をやはりタイムリミットを明確にするということは、すごく大事だと思っています。例えば、先ほど上田千曲との話もしたのですが、先が見えたら生徒は、上手に動くかもしれない。加速されるかもしれない。私はある程度どういう次元になったら、改革を成功させるためには、それこそ数年前から準備したり、検討したり、地域を見たり、そのところが非常にやはりわかりにくいと思うので、期限を例えば先ほどの上田の定時制についても、多部制を導入するということなのですが、この意見だとやはり見えないと思うのです。

だから、何年後にはこういう形を確認し、それでまだちゃんと存続の意味があればやればいいことで、ここのところが非常に責任を持つということについて、なんというか言葉はいけないですが、責任を持つことを、都合に流してしまうというようなところがあるので、ここは明確にしておくことを、委員会としては私も先ほどの中沢委員の考え方と同じです。明確にしておいて見直しをする。その時で状態が変わらなければいいのですが、やはり確認することをオープンにして、討議して、そして検討して、あるいは修正するというのを、やはり仕組みの中に入れておかないと、改革は進まないという気がします。

（飯島委員長）

改革を今、いつからやるという形は、県教委は現段階では示されているわけです。

（和泉委員）

そうです。はい。

（飯島委員長）

ただ私たちが、それに対して、どういう発言をするかということであります。慎重にという言葉は入れるべきかな、それをどういうふうの実施計画の中に生かしていくかは別として、やはり慎重に考えていただくということは大事だろうと思います。その文言につきましても、慎重に考えていただくような言葉を、入れたいと思いますが、よろしいでし

ようか。はい。ありがとうございます。

だいたい皆さんからご意見をいただきまして、最後までまいりました。終わりにつきましても、先ほどの、西村委員からいただいた件も含めまして、もう一度練り直しして記載したいと、そのように思っております。以上で最終報告案の検討を、終わらせていただきますけれどもよろしいでしょうか。

（原 委員）

何点も正副委員長さんが引き取ってまとめると、こういうお話になりました。このことの具体的な取り扱い、つまり正副委員長さんと私たち委員との関係であるとか、あるいはこの第2通全体の地域との関係であるとか、そのことについてはやはり明確にしておいたほうがいいと思うのです。お願いします。

（飯島委員長）

最終案、これ期限は決められませんが、早急に皆さんのご意見を入れながら、最終報告案を成案したいと思います。それを皆さんにお送りいたします。そしてその中でまたご意見あるところはいただき、私たちの思い違いもあるかもしれませんから、それをチェックした上で、最終的なものをもう一度お送りして最終報告案とする。そういうことで、期限は切りませんが、時間を使わずになるべく早くということで、ご理解をいただきたいと思います。よろしいでしょうか。

（荻原委員）

今までに、いろいろな要望、抗議、参考意見、その他いろいろございます。ここへ来て公開質問状という格好で、意見が出ているわけですが、これについてはやはり委員長さんと副委員長さんで、解決、やっている部分でございますが、それについてもやはり、もう結論、最終報告が出る前に、やはりちゃんと委員会といいますか、その辺をご説明いただければと思います。

（飯島委員長）

先ほど、公開質問状に関しましては、正副委員長が相談して回答を得たものに対しましては、委員の皆さんにも当然お配りする、そういうことでご理解をいただきたいと思います。よろしいでしょうか。

（遠山委員）

タイムリミットの問題、さっき出ましたが、和泉委員さんとほぼ同じだと思います。やはり、このように検討しているときに、しっかりやらないとだめになってしまいます。まして、今県会議員の皆さんがそれぞれ集まって大騒ぎして、結局最終的には、まとまるでしょうか？ですから、やはりそういうこともしっかりしておかないといけない。ここで言うということではなく、ちゃんと期日をつくって、そして本当にそうしないと、改革にならないし、それができないなら金輪際「改革」などと言うべきではない。私はこの問題は10年も前から闘ってきました。

本当に今の長野市の鷲沢市長さんが経営者協会の代表で来たところから、絶対私は高校改革そのものに反対をしてきた一人なんです。徹底的にやってきたのです。それで、私はここで、委員もぼつぼつやはり、決着をつけなくてはいけないところにきていると思うのです。

(飯島委員長)

ありがとうございました。最後は、遠山委員から私たちの思いというのでしょうか、まとめいただきましたが、以上を持ちまして最終報告案に関しましての討議、議論いただきました。先ほど申し上げましたように、成案を作成し皆さんにお諮りし、最終報告を教育委員会に出したいと思えます。ご了解をいただきたいと思えます。大変ありがとうございました。

(吉江高校教育課長)

本当に長い間、第18回にわたりましてご議論いただきまして、誠にありがとうございました。本日、米澤教育次長がまいっておりますので、皆さまに対しましてごあいさつを申し上げたいと思えますので、よろしくお願いいたします。

(米澤教育次長)

米澤でございます。後日、第二推進委員会からの報告書をいただけるということでございますが、推進委員会としての開催は、今日が最後でございますので、御礼方々、一言ごあいさつを申し上げさせていただきますと思えます。

昨年5月29日に、第1回の推進委員会を開催いたしまして、私どもから魅力ある高等学校づくり、ひとつの決定基準に基づく再編整備、総合学科高校および多部制・単位制高校の配置に関する事項と、というようなことについてのご検討、ご依頼申し上げたわけでございますが、以来18回にわたりまして、本当に精力的に、ご熱心に、また献身的にご議論を進めていただき、それぞれのお立場から、貴重なご意見をちょうだいしたわけでございます。ご審議にあたりましては、学校を視察していただいたり、地域からの意見や提言等を参考にいただきながら、全体的な立場に立って慎重な審議を進めていただいたことに対しまして、深く感謝を申し上げる次第でございます。本当にありがとうございました。

第二推進委員会におきましては、苦渋の中、非公開の時間を設けるでありますとか、あるいは記名投票という方向を採用するなど、本当に呻吟(しんぎん)するような思いの中、ご苦労いただいたわけでございます。今後は、本県の高校教育が一層充実したものになりますよう、ちょうだいいたしました報告書を参考にいたしまして、本年度末までにわれわれとしての実施計画書を策定し、速やかに高校改革を進めてまいりたいと考えております。第二推進委員会の皆さまにおかれましては、今後引き続きさまざまなお立場から、長野県教育の発展のためにご支援、ご協力をお願いできまじたらと考えている次第でございます。

最後になりましたが、この歴史的な高校改革プラン推進委員会への、これまでのご協力にあらためて感謝を申し上げごあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。

（飯島委員長）

なお、委員の皆さんには大変にいたらない委員長で、ご迷惑をかけたことを最後におわびいたしまして終わりいたします。ありがとうございました。